

赤十字NEWS

November 2015 Vol.906
http://www.jrc.or.jp



日本赤十字社
人間を救うのは、人間だ。Our world. Your move.

赤十字新聞 編集・発行／日本赤十字社 企画広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL:03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。

シリア難民問題 赤十字、各国で 人道支援を展開

出口の見えない内戦が続くシリア。1200万人の難民のうち、国外脱出者は400万人を突破し、遠くヨーロッパにも大勢の難民が押し寄せる事態になっています。住む家を追われ、仕事を失い、安心して暮らせる日常を奪われた人びとに対し、私たちができることは関心を持ち続けること、そして支援を届ける努力を絶やさないことです。シリア国内では同国赤新月社のスタッフやボランティアがいのちがけの救護活動を展開。ヨーロッパでも、各国赤十字社が難民への支援物資配布など支援活動を強めています。



© Zsófia Palyi/Hungarian Red Cross

9月22日、ハンガリーの国境の駅ヘジェシュハロムに到着した難民に対し、救急・衛生用品などを支給する同国赤十字社のスタッフ

CONTENTS

TOPICS

来春開設 赤十字の看護5大学で共同大学院
赤十字語学奉仕団 50周年記念式典
名誉総裁皇后陛下からのお見舞い
核兵器廃絶へ シンポジウム
常任理事会開催報告

TOPICS

「NHK海外たすけあい」事前キャンペーン
日赤初の外国人救護活動
映画「海難1890」
健康豆知識 冷え症

SPECIAL

千葉県支部義肢製作所
義肢・装具の製作を通じ
歩く喜び 生きる力をサポート

AREA NEWS

熊本、大阪・福岡・静岡・神奈川・福島
岩手・広島・香川・山口・兵庫・鹿児島
各地の赤十字病院表彰
アフガニスタンの車いすバスケットボールチーム来日
看護大学フロンティアセミナー
台風第21号と那国町災害義援金
赤数字回答／プレゼント

WORLD

フィリピン中部台風復興支援事業
難民申請者支援(オーストラリア)
コラム 被爆70年
守るべきいのちと尊厳



今月の出会い



赤十字語学奉仕団委員長
清水 賢治さん

語学をツールに世界と相互理解や共感を広げる

今年11月で創立50周年を迎えた本社赤十字語学奉仕団の委員長を務める清水賢治さん。「『苦しんでいる人を救いたい』という赤十字のミッションの下、同じ思いの仲間と一緒に、得意な語学を通じて活動するのがうれしいですね」とやりがいを語ります。

同奉仕団には現在、高校生から高齢者まで幅広い年齢層の191人が参加しており、外国籍や障がい者の方もいます。実は、語学レベルや得意分野も一様ではないといいます。「そうした多様性や個性をお互いに尊重していることが語学奉仕団の強みになる」と清水さんは強調します。「語学は相互理解や共感を広げていくために

重要ですがあくまでもツール。一番大切なのは、相手の立場に立ち、理解しようという気持ちだと思っています」

在留外国人への医療通訳など、周囲からの奉仕団への期待にも変化が生まれています。こうしたニーズにどう応えていくのかも委員長の手腕の発揮しどころ。「手始めに大森赤十字病院（東京都大田区）の受付窓口での通訳ボランティアをスタートしました。ミスがいのちに関わるだけに医療通訳のハードルは高いのですが、赤十字組織の一員として期待に応えていく力を付けていきたいと思っています」

PROFILE

大学4年生だった昭和56(1981)年、国際身体障害者技能競技大会(東京)での通訳・介助を行うため語学奉仕団に入団。平成16(2004)年に再入団し、今年で委員長5年目を迎えています。5年後の東京パラリンピックで通訳や介助などの活動を担えるよう、団員のスキルアップにも取り組んでいます。

来春開設

赤十字の看護5大学が「共同大学院」を開設 働きながら博士号の取得を

看護を通じた人道支援や看護教育などの分野で、将来の赤十字運動の先頭に立つ人材を育成するため、全国5つの赤十字の看護大学で博士課程を学べる「共同大学院」を新たに設置しました(正式名称「大学院看護学研究科共同看護学専攻」)。来年4月に開設の予定です。

日本赤十字社の看護師養成事業の高等教育部門として設立された学校法人日本赤十字学園では現在、全国に6つの看護大学と1つの短期大学を運営しています。6大学にはそれぞれ修士課程が開設されていますが、博士課程は東京・渋谷の日本赤十字看護大学に限られていました。

今回開設する「共同大学院」は、北海道・秋田・豊田・広島・九州国際の5つの赤十字看護大学が持つ教育研究資源を「知の共同体」として融合することで、多様な教育課程を提供していくもの。5つの大学を専用回線で結ぶ遠隔教育システムの下、自分が在籍する大学以外の4つの大学の授業の履修が可能(例えば、北海道に在籍する学生が九州で行われている授業を受講できる)となり、一大学の教育資源だけでは成し得ない、幅広い専門



5つの大学をテレビ会議システムで結んだ遠隔授業は双方向、リアルタイムで行われます



入学試験に関する質問などは各大学までお問い合わせください。	
日本赤十字北海道看護大学 入試課	
〒090-0011 北海道北見市曙町 664-1 TEL: 0157-66-3311 (代) E-mail: nyuushi@rchokkaido-cn.ac.jp http://www.rchokkaido-cn.ac.jp	
日本赤十字秋田看護大学 大学院事務室	
〒010-1493 秋田県秋田市上北猿田苗代沢 17-3 TEL: 018-829-4171 (直) E-mail: g-school@std.rcakita.ac.jp http://www.rcakita.ac.jp	
日本赤十字豊田看護大学 企画・地域交流課	
〒471-8565 愛知県豊田市白山町七曲 12-33 TEL: 0565-36-5228 (直) E-mail: kikaku-ka@rctoyota.ac.jp http://www.rctoyota.ac.jp	
日本赤十字広島看護大学 入試課	
〒738-0052 広島県廿日市市阿品台東 1-2 TEL: 0829-20-2800 (代) E-mail: nyuusi@jrchn.ac.jp http://www.jrchn.ac.jp	
日本赤十字九州国際看護大学 学生課	
〒811-4157 福岡県宗像市アスティ 1-1 TEL: 0940-35-7008 (直) E-mail: gakumukagakusei@jrckicn.ac.jp http://www.jrckicn.ac.jp	

「地域や臨床現場での教育・実践・研究リーダーを育成」

日本赤十字学園法人本部 池田由美子・学事課長

地方にある5つの赤十字看護大学の修士課程に通う方がさらに研究を深めていこうとしたとき、これまでは母校以外の博士課程に進学せざるを得ませんでした。赤十字看護大学の、同じ教員の下で研究を続けたいという学生の皆さんの要求に応えていくのが、今回の共同大学院開設の大きな目的のひとつです。

看護の業務が高度化、複雑化し、提供する場も地域社会へと拡大する中、各医療機関などでは日々の看護実践を振り返り、組織全体で看護の質を高めていけるリーダーが求められています。共同大学院では、現場でのこうした教育・実践・研究活動の中心となる人材の育成とともに、各赤十字看護大学の修士課程で研究指導できる教育者・研究者を育てていきたいと考えています。

現在、修士課程で学ぶ学生の皆さんや赤十字施設で働く方はもちろん、他の医療機関に勤務されていて「博士号に挑戦したい」という方の受験も可能です。全国から幅広い人材が集まることを期待しています。

今年、伊勢赤十字老人保健施設・虹の苑(三重県)をはじめ、特別養護老人ホーム・日赤鷺鳴荘(岩手県)、彩華園(埼玉県)、大寿園(福岡県)、錦江園(鹿児島



手拭いを手に笑顔を見せてくれた宮崎さん



発言する菅井次長

「被爆の実相の継承を」
日赤と被爆者団体が共に訴え

常任理事会開催報告	
平成27年10月20日、本社において平成27年度第6回の常任理事会が開催されました。	
記	
1 資金の借入について (秋田赤十字病院の新築工事にかかる資金の借入) 審議の結果、資金の借入に	ついては原案のとおり議決されました。 また、社員制度見直しの検討状況、新たな事業実施体制及び予算の補正にかかる9月分の社長専決事項の決定状況について、それぞれ報告しました。

日本赤十字社名誉総裁の皇后陛下から10月7日、紙ふうせんがデザインされた日本手拭い600本が日赤に下賜されました。

御下賜は、10月20日の皇后陛下のお誕生日を記念して、毎年行われているもので、日赤はお誕生日に合わせ、下賜された手拭いを赤十字の特別養護老人ホームなどの入所者に配布しています。

今年、伊勢赤十字老人保健施設・虹の苑(三重県)をはじめ、特別養護老人ホーム・日赤鷺鳴荘(岩手県)、彩華園(埼玉県)、大寿園(福岡県)、錦江園(鹿児島

「被爆の実相の継承を」
日赤と被爆者団体が共に訴え

「核兵器廃絶日本NGO連絡会」の主催による講演会とパネルディスカッションが9月26日、国連大学(東京・渋谷)で開かれ、日本赤十字国際部の菅井智次長が人道支援機関としての立場から核兵器廃絶を訴えました。

菅井次長は「核兵器の犠牲者を救う十分な能力を誰も持つておらず、その使用は国際人道法に反する」と指摘。その上で「核兵器は完全に廃絶されるべき」という国際赤十字のスタンスを説明しました。

また、その実現へ向け、組んでいる日本原水爆被害者団体協議会(被団協)の藤森俊希事務局次長も賛同の意見を述べました。



来場者からは活発な意見、質問が寄せられました

通訳や翻訳など語学を生かしたボランティア活動を行う赤十字語学奉仕団の創立50周年を祝う記念式典が10月25日、日本赤十字社本社(東京・港区)で開かれまし

語学奉仕団は1965年に創立。その前年に開催された東京パラリンピックで外国人選手の通訳や介助を務めた通訳奉仕団が前身です。

開会あいさつで清水賢治委員長は、学生メンバー6人

式典では学生時代に語学奉仕団メンバーだった日赤国際部の田中康夫主幹(現在、国際赤十字・赤新月社連

「ボランティアを軸にした組織へと日赤が進化していくために力の発揮を」「若い人たちのリンクの強化と、世



50年にわたるボランティア活動に対し、近衛社長(左)から金色有功章が語学奉仕団に授与されました。右が清水委員長

世界に届けよう支援の輪

ユースボランティアが「NHK海外たすけあい」事前キャンペーンで活躍！ 手作りパネルで赤十字活動をPR

「支援が求められている世界のひとと、支援をしてくれる日本人とをつないでいく手伝いをしたい」――首都圏の大学生らでつくるNHK海外たすけあいユースボランティアのメンバーが10月3、4日、東京・お台場で開かれたグローバルフェスタJAPANN2015(※)にブースを出展。展示パネルの説明などを通じて、一足早く「NHK海外たすけあい」(12月1、25日)の募金協力などを呼び掛けました。

自身が赤十字の知識を増やし成長していくことを重視。11人のメンバーが協力し、「NHK海外たすけあい」の情報や赤十字の国際活動などについての広報を展開中です。

メンバーの一人、田中友美乃さん(津田塾大4年生)は「赤十字イコール病院のイメージを持つ人が多いのですが、世界189の国と地域に組織があり、地域に根差した人道活動をしていることを伝えていきたい。また、日本人の一人ひとりに何ができるのかを考えるきっかけを作っていきたい」と意気込みを語りました。

グローバルフェスタでは日赤ブース内に、写真入りの解説パネルや各国の赤十字社

による人道活動をまとめた展示を行いました。これらはメンバーによる手作り。製作の中心メンバー浜田和歌子さん(獨協大2年生)は「遅くまで作業した日もありましたが、お互いの考えを出し合うことでメンバー同士の信頼も生まれました。展示を通じて、各国の赤十字社が何をしているのか、また『NHK海外たすけあい』の募金がどう使われているのかを伝え、協力者を増やしたい」とパネルに込めた思いを語ります。

「赤十字です。見ていただく下さい」。メンバーのそんな呼び掛けに、若者を中心に大勢の来場者が日赤ブースに足を止めました。

「医療支援のイメージが強い赤十字が幅広い支援活動を行っていることを知ること

ができました」「紛争地などでの支援を各国赤十字社が協力しながら進めていることなどが分かりやすく紹介されていたと思います」など展示内容やメンバーの説明に見学者からは好評を得ました。

また、グローバルフェスタ全体を通じた感想として「事実を知ることが大事。知ることが何をするべきなのかを考えることにつながると思う」「大きな支援を個人が行うのは難しいけど、募金など身の回りのできることから始めていきたい」など、来場者からは学んだ問題を自らの課題として今後に生かしたいという抱負の声も聞かれました。

※グローバルフェスタJAPANN2015は「Raise the Happiness」(お台場から広げよう！ 幸せいばい国際協力の輪)をテーマに掲げる国際協力イベント。同実行委の主催で、外務省や国際協力機構(JICA)などが共催した。



群馬県から来た高校2年生 中村翔陽さん(右)「日赤ブースを見て今の私たちの行動が将来につながっていくということを改めて感じました。そのためにベストを尽くさなければ。将来は、研究者になって、人のために役立つことに携わっていききたいと思っています」



ユースボランティア運営のFacebook
<http://www.facebook.com/jrc.tasukeai>

日本・トルコ友好親善の原点―― エルトゥール号遭難事故 日赤初の外国人救護活動

明治23(1890)年9月16日、紀伊半島沖で起きたトルコ軍艦のエルトゥール号の遭難事故。台風の中、69人の乗組員を救助した村民の勇気と、国をあげて救護活動を行った日本の姿勢は、多くのトルコ国民の心を打ち、両国の友好と親善の礎になりました。

事故から125年の今年、これらの史実を題材にした

映画「海難1890」が製作され、12月5日から全国公開の予定です。公開前にこの遭難事故の歴史を改めて振り返ってみました。

遭難事故が起きたのは、紀伊半島南方の熊野灘。明治天皇への表敬訪問から帰路についたばかりのトルコ軍艦エルトゥール号が台風風に巻き込まれ、乗組員約600人が海に投げ出されました。遭難

場所に近い和歌山県大島村の村民は、69人の生存者を救助し介抱。また遺体収容に奔走しました。神戸の和田岬検疫所内の仮病院に移された生存者の

日赤初の外国人救護となったエルトゥール号乗組員の救護活動。救護員の迅速な派遣の背景には、戦時救護を目的に病院をつくり、医師や看護師の準備を進めていた点が指摘できます。また、この2年前の明治21年の磐梯山噴火での日赤初の災害救護活動の経験も生かされたといわれています。



皇后陛下から賜った肌衣を着たトルコ人負傷者。前列に4人の日赤救護看護婦(神戸の仮病院)

12月5日公開

映画「海難1890」

田中光敏監督

日本とトルコとの深い信頼と友好関係が育まれる原点となったエルトゥール号遭難事故、そして事故から95年後のテヘラン邦人救出劇を描いた作品。トルコ人の乗組員を救助する医師・田村役を内野聖陽、田村をサポートするヒロインを忽那汐里が演じています。



©2015 Ertugrul Film Partners

知ってて良かった! 日赤のドクター&ナースが教える健康豆知識

⑱冷え症 対策に運動習慣と生活の改善を 日本赤十字社和歌山医療センター漢方内科 山田伸部長

「冷え症」とは、体の中心と末端(手足など)との温度差が大きく、体のある部分が冷たいと感じる状態です。体温そのものが低い低体温とは異なります。冷え症はいろいろな体の不調の原因にもなるので注意が必要です。多いのは月経異常や倦怠感、慢性下痢などで、神経痛が悪化する人もいます。冷え症であることを自覚できない「隠れ冷え症」の方もいますが、こうした症状が長引く際には、冷え症を疑ってみてください。

冷えが生じる原因は、代謝量(体内のエネルギー消費)の少なさにあります。運動をして体を動かしたり、食事をして胃や腸が動けば、エネル

ギーが消費され、体内に熱がつくり出され体全体の温度も上がります。ですから、筋肉量が少ない女性、体を動かさない人、小食の人は冷え症になりやすいと考えられます。体を温めるため、毎日の生活にウォーキングなどの運動を取り入れるのは予防策として大変重要です。

対策には生活習慣の改善も欠かせません。まず服装です。体を冷やすことは、冷え症につながるので、重ね着を心掛け、暑かったら脱ぐような習慣をつけます。これからの季節は、厚手の靴下、手袋も忘れないでください。また食事は、体を温める温野菜を意識してください。ショウガ

やニラなど血行を良くする食材も効果的です。お風呂は体の芯から温まるように、40度くらいのお湯にゆっくり入ります。

病院ではこうした生活改善指導と合わせ、漢方薬治療として、体を温める効果のある生薬を含む処方を使用します。漢方薬は長期間服用しないと効果がないと思われていますが、必ずしもそうではありません。即効性のあるものも多く、冷え症に処方する漢方も2週間ほどで効果が見えてくることが多いです。とはいっても、すぐに止めては、また元の冷え症状態に戻ってしまいますので、継続した服用をお勧めしています。



▲女性に目立つ冷え症の訴え。ファッションも大切ですが、頑張り過ぎは禁物です!

日本赤十字社
和歌山医療センター
〒640-8558 和歌山市
小松原通四丁目20番地
TEL 073-422-4171 (代表)

千葉県支部 義肢製作所

義肢・装具の製作を通じ 歩く喜び 生きる力をサポート

事故・病気のために腕や足を切断したり、その機能がマヒした人たちの生活を支える義肢や装具^{*}を、日本赤十字社の施設として全国で唯一製作しているのが千葉県支部義肢製作所です。県内の手足に障がいを持つ方にとって、無くてはならない存在になっています。

^{*}義肢は、切断した腕や足を保持する義手や義足のこと。装具は、半身マヒなどで失われた体の機能を補助する器具。

千葉市のスーパーマン

「今日はスーパーマンが来てますよ」
義肢製作所所長の小林恵司さんが紹介してくれたのは海老原春二さん(68・写真右ページ上)。事故で失った両腕両足に、義手、義足を装着しています。両方の義手の先に付けられた可動フックを操り、料理から庭の草むしりまで、家のことを全部自分でこなす海老原さんは、千葉市内で一人暮らし。車の運転も問題ないといえます。今日も自分で運転して製作所まで来ました。

「やるしかないからね。何をするにも時間はかかるけど、困ることはないですよ。義手や義足の調子が悪いときも、簡単なものなら自分で修理しちゃうから」
照れたように話す海老原さんですが、



千葉県支部 事業部
義肢製作所所長 小林恵司さん

小林さんは「本当は簡単なことじゃない。大変な努力をされている。パラリンピックの選手だけでなく、普通の生活をしている人の中にもすごい人たちがいることを知ってほしい」と語ります。



「義肢との接触部分が『痛い』といっている人に『良くない』と喜んでもらえるのは嬉しいですね」と、義肢の調整を行う製作係長の小池智士さん

作ってからが始まりです

一つの義肢の製作にかかる日数は2～3カ月。一人ひとり異なる手足の切断部分がピタッとはまるよう採寸・型取り、調整、仕上げ加工を行っていきます。

しかし、完成品を渡して終わりではありません。時間が経つと、体重の

増減などで切断部との接触部分が合わなくなること。可動部分などの細かなメンテナンスや修理も欠かせません。製作所が修理した義肢・装具は、昨年度1年間だけで688人分に上ります。その多くが長期の利用者。海老原さんのように付き合いが38年に及ぶ方もいます。

「義肢が完成して渡したらお終いじゃない。そこからが本当の始まりです。最後までフォローしていくのがうちの方針だから、それぞれの利用者さんとの付き合いは長いですよ」(小林所長)

赤十字だからできることを

製作所は、千葉県のほぼ中央に位置する千葉市内にあります。南北の端にある市町村の中には、車で片道1時



修理中の義足を試す鈴木さん(右)。何度も歩きながら、ひざや足首部分の角度調整、長さ調整などを繰り返します

カンボジアでも支援活動

世界の紛争地域では、銃撃や地雷などで手足を失う人が後を絶ちません。こうした被害者支援に赤十字国際委員会(ICRC)は、これまでもカンボジアやアフガニスタン、南スーダンなどに義肢センターを設立。無償で義肢・装具を提供し、リハビリテーションも施します。職業訓練をはじめ、新たにビジネスを始めるための少額融資を行ったり、子どもたちには在宅教育の機会を提供するところも。職業訓練を受けて赤十字の職員になる人たちもたくさんいます。

千葉県支部義肢製作所の小林さんも20年前、ICRCからの要請を受けてカンボジアの義肢製作所に派遣されました。「地雷は人を傷つけるのが目的。複雑な傷口は縫った後が盛り上がり、固くなるので、義肢との接触で違和感や痛みをなどを訴える人が少なくなかったですね」と振り返ります。



歴史 始まりは傷痍軍人

千葉県支部に義肢製作所が作られたのは昭和27年。千葉県内には当時、義肢製作所が一つもなく、軍で支給された義肢が壊れると、東京にある軍の施設や民間の義肢製作所まで直しに行く必要があったといえます。戦後間もないその頃は義手や義足をつけている大半は傷痍軍人。彼らから挙がった「県内に義肢製作所を」の声が、製作所設立につながりました。

その後、交通事故や糖尿病などで手足を切断した方の利用が目立つようになりますが、現在は医療技術の向上で切断しなくて済むケースも増加。一方、脳梗塞の後遺症で半身がマヒした方が、動かない足の補助機能を持つ装具を利用する例が増えています。



間以上の場所も。手足に障がいを持つ利用者が、製作所まで来るのは簡単な話ではありません。そこで力を入れている活動が利用者宅の訪問です。年間訪問回数は1000回にも上ります。

成田空港に隣接する芝山町で園芸農業を営む鈴木利夫さん(62)は、そんな訪問サービスを利用する一人。義足の右足が体に合わなくなってきたといえます。「70キロ台だった体重が57キロに痩せたので、義足の装着部分が緩くなってきました。電話をすれば家まで来てくれるので助かりますね」

義肢・装具の製作や修理は、障害者総合支援法に基づくもので、それぞれ単価が決まっています。しかし、請求単価の中に出張費や訪問費の項目



義足を作り替えるために製作所を訪れた南房総市のWさん(42)。高校一年の時に交通事故で右足を切断した当初は「生きていく気力が湧いてきませんでしたが、友達や家族の支えで頑張れた」と振り返ります

はなく、経費は基本的に製作所側の持ち出し。小林さんは「すでに十分に頑張ってきた利用者に『訪問の追加料金を』とは言えません。それに実際には我々に遠慮して、少しの故障ならば自分で修理する人も多いんです。本当に困った時に頼られる存在であるのは、赤十字の施設として嬉しいこと」と胸を張ります。

縁の下からの応援団

今回の取材で意外だったのは、お会いした障がい者のみなさんの明るさです。手足の切断というハンデキャップを抱える方に、障がいそのものの話を聞くだけに、取材も重くなると覚悟していましたが、違いました。義肢の存在が支えになっているのでしょうか？

小林さんにその疑問をぶつけてみると「私たちの仕事は、義肢・装具という道具の提供まで。その道具が利用者の皆さんの心にどう影響を与えたかまでは立ち入ることはしておりません」と断った上で、こう話します。

「手足を切断された方の中には、生活のことや将来のことを諦めてしまう人もいます。でも周りのサポートがあれば、多くの人は前を向くことができます。『やりたいことに挑戦しよう』『頑張って生活を切り開いていこう』。そんな皆さんを、義肢・装具の提供を通じて縁の下から応援していくのが、私たちの仕事です」



運転

趣味も仕事も 笑顔で全力投球



造園業



畑仕事



ダイビング

社会科見学・職場体験コースにも

千葉市を中心とする県内小中学校、高等学校の職場体験や社会科見学コースにもなっている義肢製作所。大勢の青少年が訪れます。見学と説明だけではなく、子どもたちは義足をつけて歩く体験も。小林さんは「腕や足を失うことは誰にでも起こりうることを知ってほしいし、義肢を着けた生活がどれだけ大変なことかを分かってもらえたらうれしい」と子どもたちの見学を積極的に受け入れる理由を説明します。



奉仕団と義肢製作所の連携

奉仕団から利用者へ「義肢・装具袋」を提供

義肢製作所で製作された義肢・装具は、千葉市赤十字奉仕団裁縫奉仕部会(藤井康子 部会長)手作りの「義肢・装具袋」に入れて利用者に渡されます。この袋は、義肢・装具の大きさに合わせて一つひとつ手作りしたものです。義肢・装具を入れる袋は市販されていないため、約22年前から奉仕団の皆さんが製作をしています。利用者からは、「すっぽり入るし、きれいな袋はありがたい。重宝しています」と感謝が寄せられています。



「生きていく気力が湧いてきませんでしたが、友達や家族の支えで頑張れた」と振り返ります

阿蘇中岳の噴火で連絡調整要員などを派遣！



熊本県

9月14日午前9時43分に発生した阿蘇山噴火に対し、同火山防災会議協議会(会長:佐藤義興・阿蘇市長)のメンバーでもある熊本県支部は、同日午前10時30分に警戒本部を設置。阿蘇市に連絡調整要員を派遣し、情報収集など対応に当たりました。

同支部では翌15日まで、阿蘇市役所(災害対策本部)や阿蘇火山博物館(現地災害対策本部)で関係機関との連絡調整や情報収集活動を継続。また、衛星通信機能を有した現地災害対策本部車両と支部間でライブ映像を送受信しました。2日間で7人の調整要員と通信指令車、現地本部車両など救護車両3台を派遣しました。



大量の火山灰と大きな噴石を含む黒煙が上空2000メートルまで噴き上がり、気象庁は噴火警戒レベルを3(入山規制)に引き上げました

伊都福岡ライオンズクラブ 献血 累計2万人を突破！



福岡県



同ライオンズクラブは平成10年から毎年2回の献血に協力。右は2万人目の波多江さん

9月18日に実施された伊都福岡ライオンズクラブ主催による献血で、平成10年の開始からの献血協力者数が累計2万人を突破しました。会場となった福岡舞鶴高等学校には、福岡県内の献血バス7台が集合。689人の皆さんに400mL献血への協力をいただきました。2万人目となったのは、今回が献血初挑戦の同校3年生、波多江将大さん(17)。波多江さんには、同ライオンズクラブと血液センターから感謝状と記念品が贈られました。

原発事故に備えて第1ブロック支部が合同訓練



福島県



訓練は、福島第一原発事故の後の教訓を生かして行われました

第1ブロック支部(北海道と東北6県)の合同災害救護訓練が9月29、30日に郡山市のビッグパレットふくしまで行われ、北海道・東北および茨城県から140人の救護員とボランティア230人が参加しました。原子力災害下での救護活動や放射線の影響などについて学び、簡易除染や防護の手順などを実習。また、日赤スクリーニングチームが避難者の放射性物質量の測定と除染作業の訓練を初めて行いました。

「ワールド・ファースト・エイド・デー」各地でイベント
いのちを救う力をみんなのものに！

9月第2土曜日は救急法の普及に取り組む「ワールド・ファースト・エイド・デー」。日本でも9月12日を中心に、AED(自動体外式除細動器)を使った心肺蘇生などを体験するイベントが各地で開催されました。



「助っ人」に登場したくまモンの手際のいい救命手当に会場からはドヨメキが！(熊本県)

病院スタッフががん患者支援イベントに参加



静岡県



静岡県赤十字血液センターの職員がけんけつちゃんとともに応援に

9月12日、13日の両日、静岡県立大学の芝生園地で開かれた「リレー・フォー・ライフ・ジャパン2015静岡」は、夜通しのリレーウォークなどを通じて、がん患者や家族を支援するイベントです。静岡赤十字病院チームも参加し、がん治療への思いを最後までつなぎました。



多くの職員がメッセージと一緒に参加者を励ました

盛岡赤十字看護教育記念プラザがオープン



岩手県



記念プラザは、平日の8時30分から17時までの間、どなたでも自由に見学できます

岩手県支部内に9月26日、盛岡赤十字看護教育記念プラザがオープンしました。同プラザは、平成16年3月に閉校した盛岡赤十字看護専門学校の107年にわたる歴史を記念し、支部の移転に伴い新たに整備したもの。学校生活をつづった写真や講義に使われた教材、制服などが展示されています。当日は、同校卒業生でつくる盛岡赤十字桐花会の細越幸子会長ほか関係者がテープカット。約60人の桐花会会員による見学会も開催されました。

「献血甲子園」開催！ 弁当・川柳・大喜利などでコンテスト



近畿ブロック血液センター

近畿ブロック血液センターと近畿2府4県の血液センターは10月4日、献血啓発に向けた企画などを競うコンテスト「献血甲子園」の授賞式を行いました。

献血啓発をコンテスト形式で競い合うのは全国初。「持続可能な若年層献血推進対策」「鉄人バランス弁当」「献血川柳」「献血大喜利」の4部門に団体・個人から4000余りの作品が寄せられました。大学など15団体が応募した献血推進対策部門は京都府学生献血推進協会による「学生の情熱が若者を変える」と題した広報活動が最優秀賞を受賞しました。



「鉄人バランス弁当」部門、最優秀賞を受賞したpre-dietitians代表の水野晴香さん(右)



20品目以上の食品を使用

静岡×神奈川 高校生56人が初交流会！



静岡県 / 神奈川県



仲間を増やし、いろいろな活動を知ることがJRC活性化への力に

青少年赤十字(JRC)に所属する静岡県と神奈川県の高校生メンバーの交流会が9月27日、神奈川県支部で初めて開催されました。参加したのは静岡県の37人と神奈川県の19人の計56人。

交流会は、神奈川県のメンバーが考案した自己紹介ゲームとジェスチャーゲームでスタート。両県の特徴的な活動をメンバー代表が紹介しました。分科会では、各学校の活動内容や定例会の運営方法などを報告し、交流を深めました。

2つの汽船会社と災害時の相互協力協定を締結



広島県



左から、瀬戸内海汽船の仁田社長、広島県支部 桂木事務局長、石崎汽船の一式社長

広島県支部は9月25日、広島港から松山観光港(愛媛県)への航路を持つ2つの汽船会社(瀬戸内海汽船株式会社と石崎汽船株式会社)との間で「災害時等における救護活動への相互協力に関する協定」の締結調印式を行いました。

南海トラフ地震では、広島県から四国地方への救護班派遣が想定されています。今回の両社との協定により、救護班や救護資機材、車両などの大規模な海上輸送の道が開かれることになります。



平成27年台風第21号 与那国町災害義援金のご案内

日本の最西端に位置する沖縄県与那国島は9月28日、台風21号による暴風雨のために、全779世帯の約35%にあたる275戸が損壊するなど甚大な被害に見舞われました。日本赤十字社は、職員を派遣し、被災状況を調査した上で養生シートを配布。また、被災者支援に向けた義援金の受け付けを行っています。義援金は全額が被災された方々に届けられます。皆さまの温かなご支援をお願いします。



受付期間 平成27年11月30日(月)まで

受付口座 郵便振替(ゆうちょ銀行・郵便局)

口座記号番号 00150-7-696295

口座加入者名 日赤平成27年台風第21号与那国町災害義援金

※窓口でのお振り込みの場合は、振込手数料は免除されます。
※窓口でお渡しする半券(受領証)は、寄付金控除申請の際に必要となります。
※銀行振込、被災県の沖縄県支部の口座でも受け付けております。
詳しくは日本赤十字社のホームページ(<http://www.jrc.or.jp/>)をご覧ください。



4つ
赤十字のノーベル賞受賞数

連日の日本人受賞に沸いた今年のノーベル賞。赤十字も過去ノーベル平和賞を合わせて4つ受賞するなど、その歴史に名を刻んできました。

ノーベル平和賞は、国家間の友好関係、軍備の削減・廃止、および平和会議の開催・推進のために最大・最善の貢献をした人物・団体に贈られるもので、第1回(1901年)の受賞者には赤十字思想の生みの親アンリー・デュナンが選ばれています。団体としては、赤十字国際委員会(ICRC)が第1次世界大戦中の捕虜保護活動に対し1917年に。また第2次世界大戦の最中の1944年にも幅広い人道支援活動が評価されICRCが受賞。赤十字発足100周年の1963年には、世界の飢餓や災害への救護活動、保健衛生活動などへの貢献によりICRCと赤十字社連盟(現 国際赤十字・赤新月社連盟<IFRC>)がともに受賞し、赤十字・赤新月運動としては合わせて4つ目の受賞となりました。

ICRCの3回の受賞は同一団体による最多受賞記録となっています。

プレゼント

3面でご紹介いたしました映画「海難1890」のチケットをペア5組にプレゼントいたします。以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールでご応募ください。

- ①お名前(匿名をご希望の方は、その旨もご記入ください)
②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢
⑤赤十字NEWS11月号を手にされた場所(例/献血ルーム)
⑥11月号で良かった記事、興味深かった記事はどれですか?(いくつでも)
⑦共同大学院開設 ⑧赤十字語学奉仕団 50周年式典
⑨名誉総裁皇后陛下からのお見舞い ⑩核兵器廃絶へ シンポジウム
⑪常任理事会開催報告 ⑫「NHK海外たすけあい」事前キャンペーン
⑬日赤初の外国人救護活動 映画「海難1890」 ⑭健康豆知識 冷え症
⑮特集 千葉県支部義肢製作所 ⑯エリアニュース ⑰各地の赤十字病院表彰
⑱アフガニスタンの車いすバスケットチーム ⑲看護大学フロンティアセミナー
⑳与那国町災害義援金 ㉑赤数字 ㉒プレゼント ㉓ワールドニュース
㉔赤十字NEWSのご感想、扱ってほしいテーマ、その他 Voice(読者の声)への投稿もお待ちしています。

応募先● 郵 送/〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3
日本赤十字社 企画広報室 赤十字NEWS11月号プレゼント係
FAX/ 03-3432-5507
メール/ koho@jrc.or.jp (件名「赤十字NEWS11月号プレゼント係」)

応募締切● 11月30日(月)必着
※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。



各地の赤十字病院、医師が関係機関から表彰

救急医療の提供や地域保健医療活動は、全国92の赤十字病院が果たす大きな役割の一つ。この程、これらの取り組みが、関係各機関から表彰を受けました。

洋上救急出動61件を評価

沖縄赤十字病院は10月5日、洋上救急制度創設30周年記念式典にあたり、(社)日本水難救済会から表彰され、名誉総裁盾を贈られました。洋上救急は、海上保安庁や自衛隊のヘリなどで医師・看護師が洋上へ向かい、船舶上の傷病者を救助する制度。同院はこれまでに61件・延べ112人の医師・看護師を派遣してきました。同院の佐々木秀章救急部長は「傷病者の国籍は様々ですが、海で働く世界の方々に頼られています。今後も地域、国境を越えて協力していきたい」と喜びと抱負を語っています。



高円宮妃殿下から盾を贈られた沖縄赤十字病院の大嶺靖副院長(中央)と、上原一成事務部長(左)

救急医療に貢献

平成27年度救急医療功労者厚生労働大臣表彰には、医療機関として前橋赤十字病院が選ばれたほか、個人として岡山赤十字病院の石井史子検査部長兼医療社会事業部長、高知赤十字病院の西山謹吾・救命救急センター長兼救急部長の2人も受賞。救急の日(9月9日)に表彰されました。



本社での救急医療の研修会で指導する石井部長(左)と西山部長(中央)

島しょ地域での20年以上の巡回診療を評価

また鹿児島赤十字病院の永井慎昌内科部長は、第一生命保険株式会社主催の第67回「保健文化賞」を受賞。無医村だった島しょ地域での巡回診療を20年以上にわたり継続してきたことなど地域医療への貢献が評価されたものです。10月6日の表彰式では厚生労働大臣から表彰状が贈られ、翌日には天皇皇后両陛下へ拝謁を賜りました。



永井部長

ICRC支援のアフガニスタン車いすバスケットボールチームが来日 パラリンピック目指し初の国際大会出場

武力紛争が続くアフガニスタンから男子車いすバスケットボールチームが10月に来日。来年9月のリオパラリンピック大会出場をかけた予選会(千葉)に参加し、日本や中国など5カ国のチームと対戦しました。

赤十字国際委員会(ICRC)はアフガニスタンで7カ所の義肢義足リハビリテーションセンターを運営しています。車いすバスケットチームは、ICRCが社会復帰プログラムとして5年前に結成を支援。選手の中には地雷や戦闘で脚を失ったり、半身不随になった人もいます。同チームは今回が初の国際大会出場。結果は5戦全敗でしたが、選手からは「初めての国際大会に出場できただけで夢のよう」「試合に出場し、得点できたことが嬉しい」と歓喜の涙があふれました。



同リハビリセンターのICRC職員も同行。健康管理や生活のサポートなどでチームを支えました

看護職者育成における大学と病院の協働のあり方を探る 平成27年度 日赤看護大学フロンティアセミナー開催

日本赤十字看護大学フロンティアセンター主催による「平成27年度フロンティアセミナー」が12月19日、同大学内で行われます。今年度のテーマは、昨年に引き続き「看護師の人材育成」。看護師の知識・技能向上に向けた、大学と病院の協働のあり方について議論を深めます。

- 日 時 平成27年12月19日(土) 13~16時
●場 所 日本赤十字看護大学 201講義室(東京都渋谷区広尾4-1-3)
●参加対象 医療機関で現任教育に携わる看護師、看護基礎教育に携わる大学教員など(学部学生、大学院生も可)
●参加費 1000円
●申し込み締め切り 12月4日(金) ●お問い合わせ 03-3409-0875

詳しくはホームページをご覧ください 日本赤十字看護大学フロンティアセンター
<http://legacy.redcross.ac.jp/frontier/>



WORLD NEWS

フィリピン

オーストラリア

フィリピン中部台風復興支援事業 住民参加で見えはじめた生活再建のかたち

2013年11月8日、フィリピン中部を襲った台風30号は、8000人近い死者・行方不明者を出すなど各地に甚大な被害をもたらしました。発災から2年。日本赤十字社はフィリピン赤十字社と共同で、被災住民自身の力を生かした復興支援事業に取り組んできました。いまその成果が具体的な形になって見えはじめています。

ボランティア80人を先頭に 地域保健活動

5つの分野にまたがる総合復興支援事業を展開しているのは、セブ島北部に位置するダンバンダヤン郡(人口約8万6000人)です。同郡の5つの村を対象に「住宅支援」「生計支援」「防災」「給水・衛生促進」「地域保健」の支援に取り組んでいます。

その中の1つ、地域保健の分野では、健康に生活できる環境を住民自らがつくり出していけるよう、これまでに80人のボランティアを育成してきました。

同分野を担当する上原さゆりさんは「彼ら自身が村の保健問題を見つけ出し、解決のための活動を考える段階にまできました。今後は住民への保健教育や地域の清掃などを実践していく予定です」と進捗状況を語ります。

同郡内の9つの学校を対象に衛生教育を促進する給水・衛生促進の分野では、子どもたちの主体性を重視。赤十字からトレーニングを受けた校内の衛生委員会が、児童・生徒全体に広げていく形で進められています。

クリスマスまでに全員に住宅を

住宅支援では、建設・補修を合わせて約900戸の住宅再建を実施しています。この事業も、建設者任せではなく、建設現場の見回りや作業チェックなどをボランティアが担当。地域全体で取り組む工夫の下に進められています。入居者からは「今まで住んだ家で一番!」と笑顔がこぼれています。

「完成した家に被災者の皆さんが幸せそうに暮らしているのを見ると込み上げてくるものがあります」と語るのは住宅支援を担当する吉田拓さん。「対象者全員に今年のク

リスマスは新しい家で過ごしてもらいたい。そのためにも11月中にはすべての住宅建設を終わらせる予定です」

このほか、生計支援として742人に小規模事業を始めるための資金となる現金を支給し、50人に職業訓練を実施。防災については救命救急、地域防災の講習会をボランティアとともに開催し、今後は行政との協力の下、防災計画作成、訓練へと進めていく予定です。

来年6月の新学期を新校舎で

レイテ島で日赤が支援しているのは学校補修・再建事業で、12校を対象に実施。工事開始前、住民の多くは「日赤に任せれば」と受け身でしたが、工事が進む



住宅の建設現場で作業の確認を行う吉田さん(左)

につれ変化が見られるようになってきました。同事業を担当する藤井稔さんは「住民の皆さんが屋根や壁の色、デザインなどに意見を寄せてくれることも。意見の多くは、学校長の承認を得て取り入れられてきました」と住民参加に手応えを語ります。

来年4月までに工事を完成させ、6月から始まるフィリピンの新学期に間に合わせる予定です。

オーストラリア赤十字社 難民申請者支援プログラムの チームリーダー タリア・スタンプさん

難民申請者は人種や宗教、国籍、政治思想などの理由で迫害を受けたことに強い恐怖感を持っていて、保護を必要としています。非人道的扱いに対するトラウマは、オーストラリアに到着後も精神的な影響として続いていて、社会的な孤立や精神的な落ち込みなどの問題も浮かび上がっています。

残念なことに、オーストラリアでは「難民」が政治問題になっています。ボートで到着した難民申請者への政府方針は特に厳しく、ビザ取得まで3~4年間も収容所に置かれることもあります。収容所から出る

ことが許されても、多くは働くことは認められません。2週間に1度の生活手当も十分な額ではなく、ホームレスになってしまう人もいます。

私たち難民申請者支援チームでは、彼ら自身が自分の強みを生かしていけるような支援が必要だと認識しています。その実施に向けて、より多くのボランティアの活用を考えています。今回の来日では、ボランティアにもっと支援活動に関わってもらうための案やボランティアへのサポート方法などについて、意見交換できました。

オーストラリア赤十字社で難民申請者支援プログラムのチームリーダーとして支援を行っているタリア・スタンプさんが、10月14日から30日まで研修のために日本赤十字社を訪れました。シリア難民が国際的な人道課題になる中、オーストラリアでも難民の受け入れは大きな政治問題に。同国での難民支援の課題などについて話を聞きました。

あなたの声を赤十字に寄せてください! ~アンケート(英語)ご協力をお願い~

国際赤十字は、紛争や災害など世界各地で起きることが予想される3つの人道的課題(1. 紛争や災害の中で起きるさまざまな暴力行為の防止と対応、2. 災害への取り組みと災害に強い地域づくり、3. 人道的活動の安全確保)にどう取り組んでいくべきなのかのアイデアを“Voices to Action”と題して、インターネット(www.voicestoaction.org)を通じて募集しています。

世界から寄せられた声は、12月にスイスのジュネーブで開催される赤十字国際会議で取り上げられます。ウェブサイトは英語です。アンケートはどなたでもご回答いただけますのでぜひご参加ください。



70年 守るべきいのちと尊厳 —核兵器のない世界へ—

1954年3月1日、3度目の閃光 ~広島、長崎、そして第五福竜丸~

1954年3月1日午前3時45分、マーシャル諸島共和国ビキニ環礁で米軍は水爆実験を実施。そこから160キロ地点にいた遠洋マグロ漁船「第五福竜丸」は、爆発により生じた大量の放射性降下物を浴び被ばくしました。

「死の灰」を浴びた乗組員

爆発の瞬間、西の空に強烈な閃光を見た乗組員の一人、大石又七さんはこの瞬間を次のように証言しています。「夜明け前の静かな洋上に、稲妻のような大きな閃光がサアーツと流れるように走った。(中略) 光は、空も海も船もまっ黄色に包んでしまった」(大石又七『死の灰を背負って—私の人生を変えた第五福竜丸—』)

日が昇り明るくなり始めた頃、降り出した雨の中に白い粉(放射能に汚染されたサンゴ礁の粉塵など、いわゆる「死の灰」)が混じりはじめ、やがて雪のようにデッキに積もり、その日の夕方にはめまい、頭痛、吐き気、下痢が乗組員を襲いました。

3月14日に静岡県焼津港に帰港するまでの2週間、乗組員たちは死の灰にまみれ、汚染された水や食料での生活を強いられます。無線長の久保山愛吉さんが亡くなったのは、それから半年後の9月23日のことでした。

「被爆体験」という日本人の記憶

第五福竜丸は爆心地から160キロほど離れた

た地点にいたにも関わらず、2000~3000ミリシーベルトの量の被ばくをしたと推測されています。これは広島島の爆心地から800メートル離れた地点の被ばく量に相当する値。核実験の水爆(広島型原爆の約1000倍)がまき散らした放射線がいかにすさまじいものだったのかうかがい知ることができます。

当時の日本赤十字社島津忠承社長は手記の中に次のように記しています。

「私の頭の中には、他のすべての国が核兵器の恐怖を叫ぶことに、ためらいを感じたり、あきたり、反対したりしたとしても、日本だけは、それを呼び続けなければならないし、日本だけがそれを叫ぶ権利がある、という思いが、いつもあった。広島、長崎の被爆体験はいうまでもなく、日本は1954(昭和29)年の、南太平洋のビキニにおける核実験でも、降灰によって漁船が被災している。漁船の善良な乗組員だった久保山愛吉さんの痛ましい死は、すべての日本人の記憶にやきついていることであろう」(島津忠承著『人道の旗のもとに~

日赤とともに35年~』講談社、昭和40年)

久保山さんの死は原水爆禁止署名運動の全国的な広がりへとつながり、被ばく翌年には3000万の署名とともに原水爆禁止大会の開催に至りました。しかし1945年から2013年まで地球上で行われた核実験は2050回以上。そのうち500回以上が大気圏内核実験で、放出された放射能のほとんどは太平洋に振り落ち、海水を汚染したと言われています。



©第五福竜丸展示館

廃棄処分寸前のところ新聞の投書がきっかけで保存の声が高まり、今は東京都施設として「夢の島公園」(江東区)内で一般に公開展示されている